

AI時代に人間が磨くべきは「非認知能力」と「読解力」

AIが驚くべきスピードで進化し、社会に普及する今の時代、教育はどうあるべきなのか。かつてAIで東大合格を目指すプロジェクトを率いた新井紀子さんに、SAPIX YOZEMI GROUPの高宮敏郎共同代表が聞きました。

幼児期の体験が好奇心や探究心へ

高宮 新井先生は以前から「いずれAIによって多くの人々の仕事が奪われる」と警鐘を鳴らしてこられました。現在のチャットGPTをはじめとした対話型生成AIのブームをどのように見えていますか。

新井 AIの性能が短期間でここまで向上したことには驚いています。チャットGPTは、もはや人間の知能と見分けがつかないほどの能力を持っています。現在の知的労働者やホワイトカラーの仕事は大幅に効率化され、いずれは多くの人が職を奪われる可能性があるかと危惧しています。

高宮 将来、AIに代替されないために、人間にはどのような能力が求められるのでしょうか。

新井 現在のAIは、人間が何度生まれ変わっても読みきれないほど大量のテキストデータを学習しています。ですからどれだけ多くの知識、情報を処理できるかでAIに勝てる人はいません。

高宮 人間はAIにできないことをする必要があると？

新井 AIと人間の一番の違いは、AIは身体をもっていないことです。またすべてを抽象的なデータから学んでいることです。ですから自分の身体や五感を使い、現実世界のなかでの体験を通して体得した知恵は、人間ならではの最大の武器となります。

高宮 身体をもたないAIは主体性やコミュニケーション能力、共感性や倫理観といった非認知能力をもっていない。近年、非認知能力の重要性が指摘されていますが、AI時代にはますます大切になってくるわけですね。

新井 非認知能力を身につけるには5歳までの教育が重要だと言われています。保育園で子供たちはけんかをしては仲直りする。みんなで仲良く遊ぶためのルールを編み出す。かけっこで勝って喜び、負けて悔し泣きをする。そのような幼児期の原体験が、ますます重要になってきます。

高宮 効率や合理性とは無縁な幼児の世界は、AIが絶対に入り込めない世界です（笑）。

新井 アリヤダンゴムシが動く様子を1時間も延々と見続けている。そのような大人には無意味に思える体験こそが、人間だけがもつ主体的な好奇心や探究心につながるのです。

子育てや教育の基本は変わらない



子どもにもっとリアルな体験を

読解力こそが学びの基本

高宮 先生は「東ロボくん」プロジェクトを通し、日本の中高生の多くが教科書を正確に読んでいないことに気づかれました。以来、日本人の読解力を高めるための取り組みに力を入れておられます。

新井 これは本当に深刻な問題です。文字は自然物ではなく人工物です。放っておいても自然に人が使いこなせるようになるものではありません。文字を正確に読むには、それなりの訓練が必要なのです。

高宮 逆に言えば、文字は人工的な記号なので、学習によってAIも流暢（りゅうちょう）に操れる。そのことをチャットGPTが証明してくれました。

新井 残念ながら助詞などの機能語を正しく使えない中高生はたくさんいます。その点ではチャットGPTのほうが優れています。ただチャットGPTはどんなに言葉を流暢に操れても、記号として計算処理をし、確率に基づいて文章を生み出しているだけ。言葉の意味を理解しているわけではありません。ですからAIが出した結果の意味を考えたり、それをもとに意思決定や課題解決をしたりすることは、人間にしかできません。

高宮 AIは基本的にネットから学習しています。ですから今後も図書館をきちんと使い、人との対話を通して情報を得たり、自分の考えを高めたりするスキルは大事だと思います。AIを活用して意思決定や課題解決をするうえでは、部活や学校行事を通して磨かれる協調性やリーダーシップも重要です。そう考えると、今の中等教育を本質的に変える必要はない気がします。

新井 小学校から大学までは学び方を学ぶ場です。アウトプットの間ではありません。要領よく学ぶより、発達段階に合わせて一つひとつ丁寧に積み上げ、着実な力をつけることが大事です。そしてすべての学びは読解力から始まります。最も大事なことは、中学高校の期間で自学自習できる汎用的な読解力を身につけておくこと。その力があればこれからの時代、どんな変化があっても自ら学び、道を切り開いていけるのではないのでしょうか。

高宮 世の中が変化すると、特別なことをしなくてはならないのではないかと思います。でも人間の可能性を伸ばす子育てや教育の基本は、どんなに時代が変わっても変わらないということですね。

新井紀子 / 一橋大学法学部及びイリノイ大学数学科卒業。東京工業大学より博士号を取得。専門は数理論理学。2011年から「ロボットは東大に入れるか」プロジェクト、16年から読解力を診断する「リーディングスキルテスト」の研究開発を主導。一般社団法人教育のための科学研究所代表理事・所長。著書に『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』『AIに負けない子どもを育てる』など。

高宮敏郎 / 1997年慶應義塾大学経済学部卒業。三菱信託銀行（現三菱UFJ信託銀行）を経て、2000年学校法人高宮学園代々木ゼミナールに。米ペンシルバニア大学で大学経営学を学び、教育学博士号を取得。09年から副理事長。現在、SAPIX小学部、SAPIX中学部、Y-SAPIXなどを運営する株式会社日本入試センター代表取締役副社長などを兼務。

朝日新聞 SAPIX 小学部

釧路市のちょっと明るい話題

釧路港水揚げ量 32年ぶり日本一 金額も15年ぶり140億円超

2023年の釧路港年間水揚げ数量（速報値）が千葉県・銚子港を抜き、全国1位となることが確実となった。釧路港が水揚げ量1位となるのは、マイワシが豊漁で79万トンの漁獲があった1991年以来32年ぶり。マイワシのミール（魚粉）向け単価が好調で、金額も15年ぶりに140億円を超えた。

釧路港が18万9416トンを全国1位、2位は銚子港の18万8954トン。両港とも28日で市場が閉まるため、順位の変動はないという。銚子は12年連続1位だったが、イワシとサバの落ち込みが影響した。

釧路港はマイワシが好調で数量、金額とも伸ばした。数量全体の8割以上を占めるマイワシは、同港への水揚げが前年に比べ19.1%増加した。釧路市水産課がまとめた21日現在の取扱金額は142億1833万円（前年比34.94%増）だが、そのうちマイワシは93億1600万円（同66.9%増）で、金額が大幅に伸びた要因となった。



マイワシは近海に漁場が形成されたことで同港への水揚げが増え、ミールの原料主産国ペルーでカタクチイワシの漁獲制限が行われたことで国際市況が高騰し、ミール単価が上昇した。

一方、スケソウダラは資源量はあるものの漁模様が悪く、数量、金額とも減少。サンマは水揚げがほとんどなく、イカは数量、金額とも増加したが、依然として不振。サバは巻き網漁業で14年ぶりに水揚げがなかった。

蝦名大也市長は「1991年以来32年ぶりの全国1位という大変喜ばしい結果となった。改めて漁業関係者、市場関係者をはじめとする水産関係業界の皆さまの多大なるご尽力に感謝申し上げます。来年も本年以上の豊漁となるよう期待したい」と話していた。

釧路新聞 2023/12/29